

16.0 mg/dL, 4.3-28.7) は, 感染症非発症例のそれ (中央値 9.0 mg/dL, 3.3-24.5) に比べて有意に高値を示した ($P < 0.001$). 術前 (術中) 胆汁培養陽性例の PCT 値は, 陰性例のそれに比べて有意に高値であった ($P = 0.03$). 術前の減黄の有無で PCT 値に差はなかった.

【結語】膵頭十二指腸切除術における術後 1 病日の PCT 値, 術後 3 病日 CRP 値は, 術後感染症合併症発症の早期予測に有用である.

22 術後に発症した Clostridium difficile 関連下痢症の検討

田澤 賢一・土屋 康紀・新保 雅宏
山岸 文範

新潟県厚生連糸魚川総合病院外科

【目的】術後 CD 関連下痢症 (CDAD) の特性を明確化する.

【方法, 対象】術後 1 日 3 回以上の下痢と便培養 CD (+), または便 CD トキシン AB (+) の 11 症例を対象とし, 臨床病理学的に検討した.

【結果】男:女=9:2, 平均年齢 70.3 歳. 疾患の内訳は大腸癌 6 例, 肝門部胆管癌 1 例, 炎症性疾患 3 例, 鼠径ヘルニア 1 例. 予防的抗生剤投与例は 9 例 (のこり 2 例:治療投与), 使用抗生剤の内訳は CMZ:7 例, CEZ:1 例, IPM/CS:3 例. 抗生剤投与期間は平均 4.1 日. 制酸剤使用例は 8 例 (主に H₂ 阻害剤). CDAD 発症時期は術後平均 6.9 病日, 下痢最高回数は 1 日平均 6.2 回. 平均体温 37.8 °C, WBC 平均値 9,955, CRP 平均値 7.0. 治療は整腸剤+VCM 5 例, VCM 単独 1 例, 整腸剤単独 2 例, 無治療 3 例で, 治療開始後平均 3 日で改善, 術後平均在院日数は:21 日, 全 11 例が CDAD の再発なく存命中.

【まとめ】CDAD は大腸癌術後, 予防的抗生剤投与, 制酸剤使用例に多く, 整腸剤, VCM 投与で改善, 再発なく, 予後良好であった.

23 当科における深在性真菌症の検討 - とくに癌治療患者について

森本 悠太・渡辺 直純・林 達彦
村山 裕一

村上総合病院外科

【目的】外科領域の深在性真菌症は比較的まれであるが, 確定診断が困難であり早期推定治療が重要とされている. 当科入院患者の深在性真菌症の現状, 癌治療患者のリスクと早期推定治療について検討した.

【対象と方法】当科に入院した 6,753 症例を対象とした.

【結果】深在性真菌症は確定例:3 例, 臨床診断例:1 例, 疑い例:14 例の計 18 例 (0.27%) と低率であった. 癌治療症例が 12 例と 2/3 を占めた. 危険因子は中心静脈カテーテル (CVC) 挿入:17 例, 抗菌薬 > 7 日:9 例, 人工呼吸器使用:8 例, などであった. 培養検査では血液培養陽性:3 例, 2 箇所以上の colonization:10 例, β -D-グルカン陽性:10 例であった. 治療は CVC 抜去:11 例, 抗真菌薬投与:15 例で, 全例改善した.

【結語】深在性真菌症症例は低率であったが, 癌治療患者 (特に切除不能例, 化学療法例) を深在性真菌症の high risk 患者として認識することは重要と考えられた.

24 癌治療経過中に発症した帯状疱疹

北見 智恵・河内 保之・牧野 成人
西村 淳・川原聖佳子・番場 竹生
斎藤 敬太・新国 恵也

長岡中央総合病院外科

帯状疱疹は潜伏していた水痘・帯状疱疹ウイルスが, 加齢, 過労, 悪性腫瘍, 免疫抑制剤などにより細胞性免疫が低下したとき再び活性化し, 潜伏先の神経が支配している領域に沿って小水疱を形成する疾患である. 2008 年 1 月から 2011 年 5 月までに当院で治療された帯状疱疹 256 例中, 悪性疾患合併例は 38 例 (14.8%) であった. 平均年齢 67 歳 (37-88 歳), 男性 23 例, 女性 15